MEMO

第47回日本癌学会市民公開講座

JCA JAPANESE CANCER ASSOCIATION

がんと向き合う力を、医療の進歩から

2026 6/21(日)
13:00~16:30

会場
弘前文化センター
小ホール
ハイブリット開催
現地+WEB(ライブ)配信

司会
袴田 健一 国立病院機構弘前総合医療センター 院長、弘前大学 特任教授
藤田 直也 日本癌学会 市民・患者連携推進委員長、公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター 所長

プログラム

開会の挨拶 13:00~13:15	大島 正伸(日本癌学会 理事長、金沢大学がん進展制御研究所 教授) 福田 眞作(弘前大学 学長) 袴田 健一(国立病院機構弘前総合医療センター 院長、弘前大学 特任教授)
講演 1 13:15~13:45	肺がん治療、進化しています ~ゲノム医療と免疫療法の時代~ 田坂 定智(弘前大学大学院医学研究科 呼吸器内科学講座 教授)
講演 2 13:45~14:15	情報を見極める患者力を ~~乳がん治療の進歩とともに~~ 山内 英子(ハワイ大学がんセンター 教授、ハワイクィーンズメディカルセンター乳腺外科)
14:15~14:30	休憩
講演 3 14:30~15:00	がん診療における外科治療の歴史、課題、そして期待 瀬戸 泰之 (国立がん研究センター中央病院 院長)
講演 4 15:00~15:30	遺伝子診断からどのようにがん治療につながるの? ~大腸がんを例に~ 結城 敏志(弘前大学大学院医学研究科 がんゲノム医療学講座 教授)
15:35~16:25	パネルディスカッション
閉会の辞 16:25~16:30	藤田 直也(日本癌学会 市民・患者連携推進委員長、公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター 所長)

主催:一般社団法人日本癌学会

後援: 厚生労働省、文部科学省、公益財団法人日本対がん協会、青森県、弘前市、弘前大学、青森県医師会、弘前市医師会、独立行政法人国立病院機構、弘前大学医学部附属病院、特定非営利活動法人外科支援機構弘前

司 会

袴田 健一

国立病院機構弘前総合医療センター 院長、
弘前大学 特任教授

藤田 直也

日本癌学会 市民・患者連携推進委員長、
公益財団法人がん研究会がん化学療法センター 所長

13:00~13:15　開会の挨拶

大島 正伸（日本癌学会 理事長、金沢大学がん進展制御研究所 教授）
福田 眞作（弘前大学 学長）
袴田 健一（国立病院機構弘前総合医療センター 院長、弘前大学 特任教授）

大島 正伸

福田 眞作

13:15~13:45　講演 1

肺がん治療、進化しています ～ゲノム医療と免疫療法の時代～

田坂 定智（弘前大学大学院医学研究科 呼吸器内科学講座 教授）

かつて肺がんは「治りにくいがん」の代表で、現在も日本人のがん死亡数の第1位です。しかし近年の治療法の進歩は目ざましく、とくに「ゲノム医療」と「免疫療法」という二つの柱によって、治療の現場は大きく変わりつつあります。

ゲノム医療とは、がん細胞の遺伝子（ゲノム）の変異を詳しく調べ、そのタイプに最も効果的な薬を選ぶ「オーダーメイド治療」です。特定の遺伝子変異を持つ患者さんには、ピンポイントでがんを攻撃する分子標的薬が有効で、副作用も従来の抗がん剤に比べて軽く、長期のコントロールも可能になってきました。

一方、免疫療法は、私たちの体に本来備わっている「免疫力」を活性化させ、自分自身の力でがんと戦う治療法です。免疫チェックポイント阻害薬と呼ばれる薬がその主役で、一部の進行肺がんであっても、長期間にわたり病状を抑え込む「長期生存」の夢を現実のものとしています。特に他の治療法との組み合わせにより、効果の期待できる患者さんは増え続けています。

こうした治療の選択には専門医による精密な診断とチーム医療が欠かせません。本講演では、「肺がんと診断されたら、まず何を知っておくべきか」「副作用への備え」「青森県内の医療連携」など、皆さまの不安に寄り添いながら、希望あふれる最新治療の今をご紹介します。進化する肺がん治療の最前線を、わかりやすくお伝えしますので、ぜひご参加ください。

13:45~14:15　講演 2

情報を見極める患者力を ～～乳がん治療の進歩とともに～～

山内 英子（ハワイ大学がんセンター 教授、ハワイクィーンズメディカルセンター乳腺外科）

乳がん治療は近年、薬物療法の進歩に加え、手術や支持療法の分野でも大きく発展しています。例えば手術では、乳房全摘後に神経を再建して感覚の回復を目指す試みや、リンパ節郭清後のリンパ浮腫を予防するためにリンパ管と静脈をつなぐ手技など、患者さんの生活の質を重視した新しい選択肢が広がっています。一方で、治療法が多様化するほど、患者さんが受け取る情報も増え、その中には正確でないものや個々の状況に合わないものも含まれます。

本講演では、こうした時代において患者さん自身が「情報を見極める力」を持つことの重要性について考えます。信頼できる情報源とは何か、医療者との対話をどのように活用するか、自分にとって納得できる治療選択とは何かを見極める力をつけていただきたいと思います。乳がん治療の進歩を正しく理解し、自分らしい意思決定につなげるために、患者さんが主体的に医療に関わることの意義を共有したいと思います。

14:15~14:30　休憩

14:30~15:00　講演 3

がん診療における外科治療の歴史、課題、そして期待

瀬戸 泰之（国立がん研究センター中央病院 院長）

我が国では、2人に1人ががんになり、亡くなる4人に1人ががんで命を落としている。かつ、がんによる死亡率は右肩上がりで増加しており、喫緊の重要な課題となっている。がんに対する三大治療法は、薬物（化学）療法、放射線療法、外科（手術）である。前二者は比較的近代から開発されてきたものであるが、外科治療は、いわゆる局所治療であり、古代文明の時代から、その記録が残っている。当時は体表にあるがんがその対象になっており、世界最初の内臓がん手術は1881年Billroth先生の胃がん切除と考えられている。以降、がんに対する根治療法として外科治療はその地位を確立してきた。がんを取り除く、という意義においては、今もその重要性は変わっていない。古代から始まった外科治療の歴史は、先人の英知の結実であり、かつ数えきれない経験に基づいて確立されたものであり、誠に興味深い。想像を絶するような困難を乗り越えて達成されたものでもあろう。

がんに対する外科治療（手術）の特徴は、生体にメスが加わることであり、かつ臓器機能の損失あるいは低下である。よって何らかのデメリットが生じてしまう。がんを根治するというメリットがそのデメリットを凌駕して初めて成立するものと考える。しかしながら、そのバランスが難しい。例えば、胃がんの手術は胃切除（がんをとる）、リンパ節郭清（転移がありえるリンパ節をとる）、再建（食べ物の通り道を作り直す）が必要であるが、本質的にはBillroth先生からあまり変わっていない。もちろん最近はロボット手術も導入され、外科治療も進歩していることは間違いないが、期待を込めて歴史、課題を論じたい。

15:00~15:30　講演 4

遺伝子診断からどのようにがん治療につながるの? ～大腸がんを例に～

結城 敏志（弘前大学大学院医学研究科 がんゲノム医療学講座 教授）

皆さんは「遺伝子」と聞くと、何を思い浮かべるでしょうか。遺伝する病気や体質、あるいはDNA鑑定のような特別な医療を連想される方が多いかもしれません。しかし現在では、「遺伝子」の情報を参考にしながら治療を選ぶことが、がん診療では当たり前の時代になっています。

がんは一人ひとり性質が異なり、同じ大腸がんでも効きやすい薬は患者さんごとに違います。遺伝子検査では、がん細胞の特徴を詳しく調べることで、「どの治療が効果を期待できるのか」を探ることができます。いわば、“がんの取扱説明書”を読む検査です。

現在、保険診療で行われるがん遺伝子診断は、主に手術で治すことが難しい進行がんの患者さんを対象としており、特に効果が期待できる薬剤を見つけるために役立てられています。また、血液を用いて遺伝子を調べる「リキッドバイオプシー」も実臨床で活用されており、組織採取が難しい場合にも治療選択に役立てられています。

さらに、手術後の再発リスクの予測や、血液検査によるがんの早期発見への応用についても研究が進んでおり、今後さらに活用の場が広がることが期待されています。

本講座では、大腸がんを例に、「遺伝子診断」がどのように治療につながるのか、現在の医療と未来の可能性について、わかりやすくお話しします。

15:35~16:25　パネルディスカッション

16:25~16:30　閉会の辞

藤田 直也（日本癌学会 市民・患者連携推進委員長、公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター 所長）